

近代日本人の自己形成と修養論

——明治初期～大正初期——

水 谷 修

(筑波大学大学院)

はじめに

本稿は、近代日本人の自己形成に影響を与えたものの中から修養論を取りあげて、⁽¹⁾
その受容の仕方の一端を明らかにしようとするものである。⁽²⁾

近代の日本社会では、修養論に接した人が数多くいたが、それに対する受けとめ方は一様ではなかったであろう。修養論を読んで自己形成の手がかりを得た人もいれば、単なる読物として読んだだけという人もいたに違いない。むしろ、その内容に反発して投げ出した人もいたと思われる。本稿でとりあげるのは、そのうちの修養論から自己形成の手がかりを得た人の場合である。しかし、修養論から自己形成の手がかりを得たといっても、当然のことながら、そうした人々が反応し内在化した修養論の要素には、多様なものがあったと考えられる。

本稿は、そのような中から、修養論を自己形成の手がかりとする場合の時代的な傾向性を、自伝や伝記をもとにさぐろうとするものである。⁽³⁾ 勿論、自伝や伝記を残す人の多くは、俗に“成功者”といわれる人々であるから、これによって時代的な傾向性のすべてを明らかにすることはできない。しかし、それが時代的な傾向性の一側面であることは確かであろう。平凡な庶民の反応の仕方、内在化の仕方については今後の課題にすると、ここではさしあたりそのような“成功者”の反応の仕方、内在化の仕方を明らかにしておきたいと思う。

1 明治初期

ここでは、明治初期から大正初期までの時代的な傾向性をさぐることにするが、ま

ず、明治初期の場合をみると、修養論に接した人々は、修養論が説いた様々の内容のうち、人生の目的や行動の基準に関する記述に反応し、そのなかの諸要素を内在化していたのではないと思われる。

例えば、エビスビールで「日本のビール王」となった大日本麦酒社長馬越恭平がそうであろう。馬越（弘化元～昭8，1844～1933）は、岡山県の医者之家に生まれたが、父が奇人だったために家は没落し、貧困の中で少年時代を過ごしている。13歳の時から5年間大阪鴻池で修業したのち、公事宿と用達業を営む大阪播磨屋の養子となり店を守り立てた。しかし、明治維新前後になると、播磨屋は時勢に押されて衰退し、馬越も、このような伝統的な商売に飽き足らなくなっていた。丁度そのような時（明5）に、馬越は、播磨屋に投宿していた益田孝（後の三井物産社長）⁽⁴⁾から西洋の社会事情について話を聞き、人生観や職業観に大きな感化を受けている。また、その際に、一読することをすすめられたのが、スマイルズの「西国立志編」⁽⁵⁾であった。

「西国立志編」は、当時、多くの読者を集めた修養論の一つであり、スマイルズの自己形成に対する考え方を、産業革命期に功を遂げた市民階級の人々などの短い伝記を用いて述べたところに特徴がある。この中で、スマイルズは、国家の自立・繁栄にとって国民各個人の自立が重要なこと、また、青少年の将来の期待は、国家有用の事業に自ら関与するといった大志であるべきことを主張した。さらに、この大志を実現するためには、自主独立の精神、勤勉克己の精神、果敢実行の精神、健康な身体、科学的知識などの涵養が必要なこととも強調している。

益田からすすめられて、馬越は、以来「毎日此書を読み、其内容に大に刺激せられ、愈々登龍の志を固く決するに至った」⁽⁶⁾という。その際に、馬越は登龍の志を貿易業に向けている。当時の貿易業は未熟で、緊要な発展を要する国家的事業の一つだったために、立身出世を目ざすには十分な可能性を秘めた、しかも、自らの発展が国家の独立発展に直接結びつく領域だったのである。馬越⁽⁶⁾については、『「今日あるのは全く西国立志編の賜である」というのが例であった』といわれるが、そのような言葉の中には、このような人生の目的を決定するうえでの影響も含まれているものと思われる。「西国立志編」には、次のような一節もあった。

「わが父は……貿易の邦国に財を生ずることを深く知り、常に言いけるは、『貿易売買のことは人民各個人の利となり、また邦国一体の利となることなり。』」⁽⁷⁾

このような人生の目的をもった馬越は、養家を辞して上京し三井物産の前身である先収会社の社員となり、三井物産が設立されると横浜支店長に抜擢されて実業界に確乎たる地位を得た。その後、三井物産から日本麦酒に派遣され貿易業の志は一頓挫し

たが、大日本麦酒会社が設立されると社長に就任し、90歳まで現役で活躍した。

次に、衆議院の名議長と謳われた島田三郎の場合をみると、島田も「西国立志編」から人生の目的や行動の基準について学んでいる。

「島田シャベ郎」と渾名される程の雄弁家として、あるいは正義廉潔の人柄や社会運動家としても知られた島田(嘉永5～大12, 1852～1923)は、小禄の御家人の3男として東京に生まれたが、家が貧しかったことから何度か養子に出された。17歳の時、軍人を志して沼津兵学校に入り、同校在学中に「西国立志編」に接している。これを⁽⁸⁾読んだ島田は、大成志向の将来の期待を動機づけられ、自らの志を工学の分野に変え、克己勤勉の精神をもって学問に取り組んだといわれる。

「17歳の時軍人を志し沼津兵学校に入学したが一日中村正直氏のスマイル⁹⁷の西国立志編を一読して大いに発奮し所持の書籍を一切売却して其旅費を作り、奮然として上京して、神田錦町の其家の一室を借り受け自ら飯を炊き、菜を調べて熱心に苦学し……大学南校の化学科に入学し大に工学を収めて世に立たんとなりました……。」⁽⁹⁾

沼津兵学校を中退し、苦学して大学南校化学科に入学した島田であるが、工学は自らの性格に逆せずと認めて大蔵省付属英学校に転じ、22歳の時、毎日新聞社に入り翻訳に従事した。39歳で衆議院に初当選し、衆議院議長も経験している。この間、公娼廃止や足尾鉾毒事件などの社会問題にも取り組んでいる。

一方、「西国立志編」以外では、駿河銀行を創立した岡野喜太郎の場合、「学問のすすめ」を読んだことが、銀行業を通じて地域社会に貢献しようと志すきっかけの一つとなったと思われる。

静岡県の名主の長男に生まれた岡野(元治元～昭42, 1864～1967)は、8歳から10歳までの3年間初学舎(寺子屋)に通い、教科書として福沢諭吉の「学問のすすめ」に接した。

「学問のすすめ」は、「西国立志編」と同様に、明治初期に多くの読者を得た修養論の一つである。「学問のすすめ」を修養論としてとりあげることに奇異を感じるかもしれないが、次のような内容を考えると、これを修養論としても做すことができる。福沢が「学問のすすめ」の中で強調したのは、青少年は小成に甘んずることなく大志を抱き、将来は国家社会の発展に貢献すべきこと、そのためには、とくに西洋日新の科学を重んじ実学を学ぶべきことである。しかし、福沢が実学の重要性を強調した目的は、それを国家社会の発展や立身出世の単なる手段とすることだけではなく、それを学ぶことによって、合理的なものの考え方、生き方を学び、近代国家の一員として相応しい意識や行動様式を形成させることにあった。例えば、それは自らの力で

人格を向上させ独立自尊の精神や自由平等、批判創造の精神、判断力などを涵養することである。すなわち、福沢はこれらの涵養にとって有効な一つ的手段として実学を考え、これを学ぶことを強調したわけである。

「学問のすすめ」は、このような内容を含んでいたが、これを読んだ岡野は、自分の周囲に残存する封建的な制度や習慣に反発した。さらに、名主としての岡野家の地位にまで疑問を抱き、家の権威に頼らず自らの人格を磨くことによって、地域の発展のために自己の犠牲を惜まない指導者となることを決意したといわれる。⁰¹

「このとき岡野一家だけの貯金ではなく、村ぐるみの貯金を考えたところに、常人とはちがったところ——子供のころからつねに胸のうちにあたためてきた＜村のためになろう＞という気持ち」が、決してウソでなかった証拠が見られるのだ。これは別ないい方をすれば＜指導者意識＞のあらわれ、ということになろう。

岡野家の歴史や福沢諭吉の『学問のすすめ』が幼いときから彼の魂に呼びかけていたもの——人間の権威とは自分みずから築きあげるものだという生き方に、いよいよ答えようとしたのだ、ともいえるようだ。⁰²

ここには、「学問のすすめ」を読んだ時の決意が、貯蓄組合の設立となってあらわれていることが述べられている。伝記という性格上、これには筆者の意図が含まれているかもしれない。しかし、95歳の時に書いた自伝の中で、少年時代に「学問のすすめ」を読んだと述べる程に影響を受けた岡野が、このような人生の目的の決定やその実践のうえにもこの本の影響があったのではないかと考えることは、あながち筆者の想像だけとはいえないであろう。その後、岡野は本格的に銀行経営に乗り出して順調な発展を遂げている。第2次大戦中の銀行合併の行政指導に対しても、国家や株主、預金者のために適切でないとして、拒否の姿勢を貫いた。⁰³⁰⁴

また、地域社会に対する貢献という人生の目的などを「学問のすすめ」から学んだという点では、福島県錦村の初代村長星喜三太の場合も同様であろう。星（弘化4～明42、1847～1909）は、福島県で苗字帯刀を許された農家の2男として生まれ、25歳で同じ農業を営む星家の婿養子となった。星が「学問のすすめ」に接したのは、丁度その頃である。この本を読んで星は、「目ざめさせられたような気分になり、感激した」という。何故ならば、この中に述べられている政治は民の代理として行うこと、自由平等の精神や個人の独立が重要なこと、学問の有益なことなどの主張に納得できたからである。⁰⁵元来政治好きの星は、その後「学問のすすめ」の影響もあって、新しい知識の吸収に努め村の発展に尽力した。そうした活動が認められ、明治13年には戸長に任命され、22年には村長に当選して20年間その職にあった。この間、星は、絶え

ず村を豊かにすることを考え、村政を進めるにあたっては、住民の意見を尊重して行ったといわれる。

2 明治中期

明治20年、30年代になると、修養論の受け手の中には、明治初期と同様に修養論が説いた人生の目的や行動の基準に関する記述に反応する人もいたが、一方では、処世・修養の術の面にも反応し、それを身につけた人もいたのではないだろうか。

例えば、製菓業不二家を創立した藤井林右衛門は、行動の基準に関する記述に強く反応した一人と考えられる。藤井（明18～昭43, 1885～1968）は、「人に頼らない」ことを行動の基準、生活の信条としていた。

「どんなに困っても、人から一厘でも借りるものではない。親であろうと兄弟であろうと、金銭のことで人の情にすがるといことは、相手に対して一生涯頭が上がりないことになる。借りたり、世話にならなければ、学校を出なくとも、頭を下げる必要はない。対等に暮してゆける。」

このように、藤井が人の世話にならないといった自主独立の精神を身につけたのは、小学校にも行かせてくれない養母への反発など、子供時代の体験が強く影響していると考えられる。藤井は愛知県出身で、6歳の時鉄道員藤井善弥の養子となったが、小学校にも通わずに義弟の子守りをさせる養母の扱いに不満を抱き、11歳の時に自ら希望して丁稚奉公に出た。しかし、その後商人になることを決意して新しい奉公先を探したが、小学校を出ていないためになかなか見つからず悔しい思いをしている。この時の体験が、頼ることができるのは自分だけだという思いを抱かせ、自主独立の精神で行動するという信念を持たせたことは容易に推測される。さらに、それに加えて、「西国立志編」を読んだこともその一因だったようである。藤井は、15歳の時念願だった商家の奉公先を横浜に見つけたが、そこに向う途中にこの本を読んでいる。

「岐阜の田舎から横浜にくる道中、『西国立志編』などという本を読んだ。その中に、『天は自ら助くる者を助く』という言葉があった。歩きながら、この言葉を何度も口ずさんで、横浜についたのである。」

藤井は、この本に書かれている「天は自ら助くる者を助く」の一文を何度も口ずさんだというように、「西国立志編」を読んだことによって一層自主独立の信念を強く

したと思われる。⁽⁶¹⁾

一方、星製菓を創立し、積極的な広告で「日本の製菓王」といわれた星一も、この時期に「西国立志編」に接した一人である。星の場合、この本を読んで、行動の基準や人生の目的だけではなく、処世、修養の術に関する記述にも反応したと思われる。星喜三太（前掲）の長男として生まれた星一（明6～昭26, 1873～1951）は、17歳で上京して東京商業学校に学んだが、都会の多数の英才をみて成功の自信を失いかけた。そのような時に、校長高橋健三（後の大阪朝日新聞主筆）から「西国立志編」を読むようにすすめられ、早速全編を読んで⁽⁶²⁾いる。

「『いい本を教えていただいた。文明とはこういうものだったのか。成功とはこういうものの上に築かれるものだったのか……』新しい世界が目の前に開けたような気分だった。」⁽⁶³⁾

「ひまがあると読みかえす。『西国立志編』のなかの、各分野で名をあげた人物たちの息づかいが伝わってくる。ああならなければならない。それが日本を向上させるのだ。『外国へ行って勉強したいなあ』」⁽⁶⁴⁾

星一は「西国立志編」に接して、成功するためには、奮闘努力の精神や文明を発展させる基礎となる科学的知識を身につけることが重要なことを知り、成功への決意を新たに⁽⁶⁵⁾した。同時に、また日本の向上に貢献しようという意識も明確にしている。このように「西国立志編」に刺激された星は、文明に直接触れようと渡米することを決意したが、その際には、アメリカについての情報を綿密に収集している。

「アメリカ留学の熱にうかされている佐吉〔星一の幼名〕だが、無計画な性格ではなかった。……慎重な計画が大事なことは『西国立志編』のなかでも各所に書かれている。佐吉はアメリカに関する本を読んだり、行って帰ってきた人をたずねたりし、現地の事情を頭に入れるようにつとめた。」⁽⁶⁶⁾

星一については、「西国立志編」が人生の指針、人生そのものとなったといわれるが、⁽⁶⁷⁾その中には、このような処世・修養の術についての影響も含まれているものと思われる。また、処世・修養の術にとくに強く反応した人物もいる。元日産コンツェルンの総師鮎川義介がそうである。鮎川（明13～昭43, 1880～1918）は、山口県出身で、父は山口新聞の支配人だったが、士族気質が抜けないうえに7人の子どもをかかえて貧しかった。しかし、鮎川は伯父井上馨の知遇を受け、山口高等学校から東京帝国大学へ進み工学を修めた。大学在学中の明治35、6年頃に、アメリカの鉄鋼王カー

ネギーの「実業の帝国」に接している。

「実業の帝国」は、明治20年代以降の実業の発展に呼応するかのよう⁴に登場した、実業人の育成を目的とする修養論の一つであり、そのようなタイプの修養論を代表するものといえる。この中で、カーネギーは、自らの体験をもとにしながら実業人としてのあり方を述べている。すなわち、実業界での成功を志す青少年に対しては、国家社会の進歩安寧に寄与することに留意して、公共の精神や勤勉儉約の精神、決断力、誠実心などを形成すべきことを主張し、さらに、既に功を遂げた実業人に対しても、富の使用法について言及した。

鮎川は、これを読み「大いに感じるところがあった」という。それは、立身出世するためには主人に焦点をあわせて行動すべきであるという、処世・修養の術についての記述に対してであった。

「その中に、こういうことが書いてある。立身出世しようという大望を抱いて、たとえばある商店に丁稚奉公をする。そのときに自分の焦点にすべきものは、その主人公である。……その人物が尊敬できる人でなかったら、勤先を変えろ。そういう主人が見つかるまでどんどん変えろ。……そうしてどうしても尊敬できる主人を得られなかったときは、独立しろ。」

しかも鮎川は、そのことを就職する際に実践している。

「大学を卒業すると井上さんは、私に三井入りをすすめた。私は言下にお断わりした。理由は簡単である。それはカーネギーのいわゆるボスが好ましくなかったからである。」

井上馨からの就職のすすめを、ボスが好ましくないとの理由で断った鮎川は、芝浦製作所やアメリカの鋳物会社の職工となって修業し、帰国後は、戸畑鋳物会社の設立に参画して日産コンツェルンの第一歩を踏み出している。

3 明治末・大正初期

明治末・大正初期になると、修養論の受けとめ方にも、明治初期とは異なる傾向があると思われる。その傾向とは、この時期になると修養論の受け手は、修養論が説いた諸要素のうち、人生の目的に関するものよりも行動の基準や処世・修養の術に関するものに反応し、それらを内在化していることである。

明治の末になっても、「西国立志編」はその生命力を保っているが、大屋晋三は、先にみた藤井林右衛門と同様に、この本を読み自主独立の信念の形成に影響を受けている。帝人のワンマン社長としてその名を馳せた大屋（明27～昭55、1894～1980）は、群馬県の小学校長の家に生まれ、苦学して中学校を終え一時代用務員をした後、東京高等商業学校に学んだ。同校卒業後は、当時金子直吉を擁して日の出の勢いの鈴木商店に入り、型破りの性格を遺憾なく発揮して活躍、32歳の時に帝人に派遣され、51歳で同社社長となり、一時政界に出て商工大臣なども経験した人物である。その大屋は、自らの半生を次のように振り返っている。

「私はおこがましくもまた高慢にも、自分の運命はおのれの意志、おのれの計画によって切開いてきたと自負している。事実、私は中学に入る時代から、つねに自分で考え処理してきた。私のこれまでの人生航路では、長上の人から特に引立てられたことがほとんどない。……それでも私はある時はヨロメキ、ある時は回り道をしながらも、大先輩の指導育成の下に進んだ人と、結局は同じところまでたどりついたと自負している。」

ここには、自分の運命は自ら切開いてきたという大屋の歩んだ自主独立の半生が語られている。大屋がこのような生き方をするきっかけとなった一つには、中学時代に読んだ「西国立志編」があったと思われる。何故なら、以下にあるように、この本によって独立自主の精神を強くたたき込まれたと思うと自ら述べているからである。

「5年の時にスマイルスの『自助論』を教科書に使い、私の環境に思い合わせて非常な感化を受けた。はじめの方などは暗記するくらいに愛読した。『天は自ら助くるものを助く』の言葉は、私の座右の銘となったが、私はこの本によって独立自主の精神が強く頭にたたき込まれたように思う。」

また、この時期には、大屋晋三以外にも行動の基準に関する記述に反応した人がいたと思われる。次の投書を書いた人も、恐らくその一人であろう。

「戦後青年に夢なく、如何にせば彼らをして奮起せしめ、奮闘努力の士たらしめ得るかを、考えても考えても私にはよい手段が見出されないのです。……小生の少年時代、通信中学の機関紙でよく読んだ前社長増田義一氏の講話集などは、大変よかったです。」

新渡戸稲造とともに当時の代表的な修養論の著者の一人である増田義一の修養論は、成功のための奮闘努力主義や克己自制主義を強調した点にも特徴があるが、この投稿者のように、増田の修養論を読み、このような信念をもって行動するようになった人も多くいたのではないだろうか。

例えば、小学校卒業後織物問屋などで寝食を忘れて修業に励み、明治45年に、28歳で現金織物問屋瀧富商店を開業した瀧富太郎（明17～昭38，1884～1964）の場合がそうであろう。

「どうか自分も立派な人間になり、独立開業してひとかどの成功者と言われるようになりたいと思い努力したものであります。勿論同輩との遊び事の付き合いなどは一切せず、暇さえあれば『実業之日本』や修養論に読み耽っている私を、同僚は『あれは変人だ』と笑いましたが、将来独立の大望をもつ私には、増田先生が説かれた『現在の快楽を犠牲にせよ』の御一言がしみじみと身に浸みていたものですから、同輩の嘲りなどは少しも気にかけませんでした。」

瀧は、自ら語るように「現在の快楽を犠牲にせよ」という増田の言葉に従って修業に励み独立開業までこぎ着けた。独立して瀧富商店を開業した瀧は、後に「顧客本位」を同店の経営方針として掲げている。

「顧客本位の信条は当店に課せられた使命であるとの信念をもって、良品主義、年中無休、営業時間は日の出から日の入りまでとして……顧客の利便を図っております。」

それは、「青年時代から愛読している雑誌『実業之日本』に書かれた新渡戸稲造博士の“実業の目的”と題する論説から学んだことの実践であった。すなわち、瀧は、新渡戸稲造の修養論の一部分を読んで、実業の目的は事業を楽しむことだと知り顧客のために仕事をするという信念をもつに至った。しかも、この信念を良品主義や年中無休などの経営方針として具体化したわけである。

一方、この時期には別のタイプの受けとめ方もみられる。十二銀行（現北陸銀行）の常務を務めた馬瀬は、増田の修養論から大成するための処世・修養の術についても学んでいる。

馬瀬（文久3，1863生）は、富山県出身で、小学校卒業後は進学を断念して家業の種子油の製造販売を手伝っていた。しかし、灯油ランプが普及するにつれて家業に不安を抱き、21歳の時に第十二国立銀行に入った。勤勉で責任感の強い性格と算盤など

の能力が認められ順調に昇進したが、昇進するにつれて将来の一層の発展を考え、学校教育を受けていないことに不安を感じた。それを独学自習で補おうと考えていた矢先に、初刊以来愛読していた「実業之日本」で、次のような増田の修養論に接している。それは、たとえ学校教育を受けていない人でも、事業に精通すること、他人以上に勤勉に努めること、よく物事に注意が行き届くことの3点に努力すれば、教育を受けていない欠点を十分に補えるということを主張したものである。

「氏〔馬瀬〕はこの一文を熟読し、なるほど仮令高等の教育を受けてなくとも、自分の態度一つによりて昇進の余地のあることを感じ……果して然りとすれば増田社長の説ける3点は完全でなくとも自分に備わっている。備わらざるまでも、少くとも自分は実行すべく心がけを有っている。今後之が実行に努力すれば、発展決して不可能でないことを信じた。」

馬瀬は、増田の修養論の一つを読んで、教育を受けていなくても自分の態度如何で昇進できることを知り、以後「教育を受けなかったことを苦痛とせず」、増田が説いた点に留意して仕事に取組んだといわれる。⁽⁶⁹⁾馬瀬は常務取締役まで務めて退職したが、その際増田の元に、「編集上の参考図書購求の一端に充てて貰いたい」と退職金の一部を送っている。それは、増田の修養論など「実業之日本」に、職務上処世上負うところが大きかったことに謝恩するためであったといわれる。⁽⁴⁾

次に、馬瀬や瀧などと同様に、修業時代に「実業之日本」を受読して増田の修養論に接したクラブ化粧品品の中山太陽堂社長中山太一の場合をみてみよう。中山（明13～昭31、1880～1956）は、山口県の名望家の長男として生まれたが、20歳の時に家は没落し一家離散の状態となった。この時、「是が非でも人生に勝利せねば」と決意した中山は、洋食店の出前持ち、雑貨店の小僧、石炭商の書生などを経て、薬種酒類問屋丸見屋に入店、支配人にまで昇っている。しかし、禁酒の信念がこの商売にとって障害となることを自覚し、同店を辞して中山太陽堂を開業、当時幼稚だった和製化粧品品の改良に成功して業界の覇者となった。その中山が、長年増田の修養論を読んでとくに感銘を受けたのは、向上・発展するための处世・修養の術についてである。

「増田氏は……先輩の優れたる長所や成功された体験談を後進に紹介して、其の発奮向上を促されたのでありました。殊に青年時代は自己の欠点を自覚反省し、先輩の長所を見て益々修養して行く所に向上発展があると言う事を私自身にも痛切に感じ得た……今なお深い感銘を持って居る次第であります。」⁽⁴⁾

中山が、増田の修養論から学んだその術とは、自己の欠点を自覚反省し、さらに先輩の長所を見て修養するということであった。

おわりに

これまで明治初期から大正初期の間に修養論を読んだ幾人かの“成功者”⁽⁴²⁾をとりあげ、彼らの修養論に対する受けとめ方について検討してきた。ここで検討した人々の受けとめ方を見る限り、明治初期から明治末・大正初期の間に、既に、修養論の受けとめ方に変化があると考えられる。その変化とは、明治初期では、修養論が説いた様々の記述のうち「処世・修養の術」よりも、「人生の目的」や「行動の基準」に関するものに強く反応し、それらを内在化する傾向があること、ところが、明治20年代になると、「人生の目的」や「行動の基準」とともに「処世・修養の術」に関するものに反応する傾向もみられ、明治末・大正初期には、「人生の目的」よりも、むしろ「処世・修養の術」や「行動の基準」⁽⁴³⁾の面に強く反応し、それらの要素を内在化する傾向があることである。

最後に、残された課題について簡単に述べておくと、一つには、本稿でとりあげていない大正中期以降の受けとめ方についての検討がある。また、これまでみてきた明治初期から大正初期の間の変化について、それをもたらし要因の分析も残されている。修養論の内容上の変化も一因と考えられるが、それだけではこの変化を充分に説明することはできない。例えば、明治末期の学歴社会、管理社会的状況の進行と、処世・修養の術に反応する傾向との間に何らかの関係を見出すことができるかもしれない。このような点についても、今後検討を進めることにしたいと思う。

〔注〕

- (1) 「修養」は、現在あまり使用されることのない言葉だが、第2次大戦以前には極めて卑近に用いられていた。しかし、その意味内容については非常に多岐にわたっており、明治末から昭和初期にかけて多くの修養論を残した加藤咄堂も、「修養の語義多端、之を用うる人々ならず」（『修養論』、東亜堂、明治43年、P.3）と述べている。この多岐にわたり用いられた修養の概念を抱括的にとらえるならば、修養とは、「自己の主體的な意思にもとづき、一生涯にわたり人格の完成・向上を直接的な目的として、自らの力で心身を鍛錬し道を修め徳を養うこと」と定義することができる。本稿でも、このように広い意味で「修養」を用いるが、そうすると、修養論とは、上記の意味内容をもつ修養についての所説ということになる。さらに具体的な内容に立ち入っていえば、修養論は、修養の必要

性や人生の目的、行動の基準、処世・修養の術などについての所説といえる。すなわち、修養論は、現在あるいは将来の生きる目的の獲得やそれに必要な生活態度、行動様式の形成のための手引きという性格をもっていた。一方、修養論の受け手の側から捉えるならば、修養論に接することによって、特定の人生の目的に動機づけられたり、あるいは、その目的に対応する生活態度や行動様式を形成する可能性をもっていたと考えられる。

- (2) 近代日本人の自己形成に影響を与えたものには、修養論、講義録、茶・華道をはじめとする遊芸、落語・講談といった寄席演芸など様々なものが考えられる。

そのうち、本稿でとりあげる修養論についての先行研究をみておくと、それは修養論をとりあげる視点の違いから、次の三つのタイプに別れる。①明治・大正期における知識人の思想形成を理解するための手がかりとして各人の修養論をとりあげ、その内容を明らかにしたもの（宮川透「日本思想史における〈修養〉思想」、古田光他編『近代日本社会思想史・Ⅱ』有斐閣、昭和46年、所収。武田清子「キリスト教受容の方法とその課題」、武田清子編『思想史の方法と対象』創文社、昭和36年、所収など）。②立身出世論の変質という視点から、修養論を「成功ブーム」などがもたらした軽佻浮薄な社会風潮の是正を目的とした新たな出世論と捉え、その性格を明らかにしたもの（門脇厚司「日本的『立身・出世』の意味変遷」、《教育社会学研究》第24集）東洋館、昭和44年、所収。竹内洋『日本人の出世観』学文社、昭和53年など）。③日露戦争後の国民教化政策との関連から修養論をとりあげ、その性格を明らかにしたもの。ただし、修養論の性格規定では、それに国民教化政策と呼応する性格を認めるもの（松村憲一「近代日本の教化政策と『修養』概念」《社会学討究》19巻1号）早稲田大学社会科学研究所、昭和48年、所収など）と、国民教化政策とは異なる「小市民意識」の萌芽をそこに認めるもの（山本恒夫「社会教育の歴史」辻功・山本恒夫編『現代社会教育概論』第一法規、昭和52年、所収など）がある。

しかし、これらの研究は、一部の修養論の性格を解明したり、社会的機能の一端を推測したにとどまっており、修養論の構造の解明や自己形成機能の実証的検討が残されていた。そこで、拙稿「修養論の構造」（筑波大学大学院教育学研究科に前期論文として提出、昭和55年）では、日露戦争後から第2次大戦終了時まで刊行された修養論の構造を解明して、五つの修養論の類型を抽出し、その時間的な変化を明らかにした。また、当時の青少年の将来に対する期待の構造と修養論の構造を比較し、両者に共通する要素を発見した。

- (3) 一般に、自伝や伝記を分析の対象とする場合、そこには一定の限界がある。すなわち、自伝の場合には、執筆時の価値観で過去が判断されやすいことや、公開

を前提としているために事実がそのまま語られないこと、また伝記の場合には、作者の意図が入り込みやすいこと、などである。しかし、自伝や伝記に書き記すということは、その人の一生にとって相当の重みをもっていた事柄と考えられるので、修養論の受けとめ方について検討する場合にも、そうした自伝や伝記の記述に注目することは、一つの有効な方法となりうると思われる。

- (4) 大塚栄三『馬越恭平翁伝』馬越恭平翁伝記編纂会、昭和10年、P. 39
- (5) スマイルズ（中村正直訳）『西国立志編』（原名自助論）は、明治4年以来今日に至るまで多数の出版社から刊行されており、総発行部数は100万部に達するといわれる（講談社版『西国立志編』昭和56年に所収の渡部昇一の解説）。

次の記述からも、『西国立志編』が多くの読者を得ていたことが推測される。

「市価騰貴し、出版部にて売り出す価の幾割高にて、取引せらるゝに至る。これ出版界未だ會て聞かざる所なり。或る書估の如きは、為めに思わざる奇利を博し、喜びの余り、本書を神棚に飾り、燈下を供して、其の大恩を拝謝したりしという。」（石井民司『中村正直伝』、成功雜誌社、明治40年、P. 65～6）

- (6) 大塚栄三、前掲書、P. 39
- (7) スマイルズ（講談社版）、前掲書、P. 120
- (8) 当時の大成志向及び小成志向の将来に対する期待については、浅井経子・水谷修「明治・大正・昭和の青少年意識——将来に対する期待——」（伊藤俊夫、山本恒夫、吉川弘編『生涯教育と青少年教育』ぎょうせい、昭和56年、所収）を参照のこと。
- (9) 岩谷愛石『現代青年成功の近道』愛国青年社、昭和8年、P. 217～8
- (10) 福沢諭吉の『学問のすすめ』は、明治5年から9年にかけて発表されたが、17編を合計すると発行部数は400万部になるといわれる（伊藤正雄訳『学問のすすめ』社会思想社、昭和52年に所収の訳者の解説）。
- (11) 小島直記『岡野喜太郎伝』フジ出版社、昭和42年、P. 62～4
- (12) 同書、P. 104
- (13) 日本経済新聞社編『私の履歴書』（第5集）日本経済新聞社、昭和32年、P. 74
- (14) 同書、P. 101。なお、岡野は息子や孫を慶応義塾に学ばせているが、このような行動にも『学問のすすめ』の影響の強さが推測される。
- (15) 星新一『明治・父・アメリカ』新潮社、昭和53年、P. 15。なお、著者の星新一は星製薬の創業者星一の息子であり、星喜三太にとっては孫にあたる。
- (16) 同書。P. 48

- (17) 実業之日本社編『築き上げた人々』実業之日本社, 昭和31年, P.176
- (18) 明治20年代になると、『学問のすすめ』の影響力は既に衰えていたが、『西国立志編』は、なお多数の出版社から刊行されて多くの読者を得ている(山宮允『書物と著者』吾妻書房, 昭和24年, P.179)。
- (19) 実業之日本社編, 前掲書, P. 174
- (20) その後、藤井は、奉公先の店主の妹との結婚を機に独立して西洋食料品店を開業したが、まもなく、外国人相手の洋菓子業に転じた。洋菓子業を始めた藤井は、一流主義をモットーに洋菓子研究のために渡米するなどして、今日の不二家の基礎を築いた。
- (21) 星新一, 前掲書, P P.65~6
- (22) 同書, P.70
- (23) 同書, P.71
- (24) 同書, P.66。東京商業学校を終えた星一は、渡米し、苦学してコロンビア大学を卒業した。滞米中には『日米週報』などの雑誌を発行し、帰国後は星製菓を創立している。製菓業を始めた星は、自らの人生観を述べた販売店主向けのパンフレット「科学的経営法の真諦」を作っている。このパンフレットの内容からも、如何に星が、『西国立志編』から影響を受けていたかが推測される(星新一『明治の人物誌』新潮社, 昭和53年, P.9)。
- (25) カーネギー(小池靖一訳)『実業の帝国』(実業之日本社, 明治35年)は、「初版は発売後わずか3日で売り切れ、その後短い期間に数十版を重ねた」といわれる(増田義彦『実業之日本社七十年史』実業之日本社, 昭和42年, P.19)。
- (26) 鮎川義介「私の事業信念, 創意を生かす」(『実業之日本』昭和28年1月15日号), P.16
- (27) 日本経済新聞社編, 前掲『私の履歴書』(第24集)昭和40年, P.289
- (28) 日本経済新聞社編, 前掲『私の履歴書』(第6集)昭和33年, P.186
- (29) 同書, P.152
- (30) 明治末から大正初期の修養論は、実業之日本社のものが中心となっていた。この時期には、実業之日本社が刊行した修養に関する書籍が爆発的な売れ行きを示し、修養と健康を編集方針として掲げた『『実業之日本』を読まぬものは修養を知らぬものの如く言われる』状況も呈した(竹内尉『現代名士新人立志伝』昇龍堂, 大正14年, P.329)。『実業之日本』は、発行部数20万部を誇り代表的な青年向け通俗雑誌となったが、とくに、これに連載された増田義一と新渡戸稲造の修養論は、当時の青年に大きな影響を与えた。2人の修養論は、後に数冊の単行本にまとめられたが、なかでも、新渡戸の『修養』は、明治44年の初版発行以来第

2 次大戦までの間に 150 版を、増田の『青年と修養』は、大正元年から第二次大戦までに 124 版を重ねたといわれる（『実業之日本』、広告）。

㉔ 『オール生活』昭和30年7月号（実業之日本社）P.111。増田は、通信中学「実業講習録」の「講義録」の中でも修養論を説いている。

㉕ 増田の修養論は、個人の世俗的な利益の獲得を肯定し、成功に至るプロセスの倫理化を目的としたところに特徴がある。つまり、世間の信用を重んじて他者には被容的な態度で臨み、また、克己自制の精神をもって奮闘努力し、身体の鍛練や常識の涵養も忘れずして成功を勝ちとるという生き方を示した。

㉖ 増田は克己心の修養について、例えば、次のように述べている。

「大いに成功せんがために目前の快樂を犠牲に供すると諦めるのである。前途に大いなる楽しみがあるから、このくらいの事は辛抱出来ないはずがないと抑えるのである」（増田義一、前掲書、P.75）。

㉗ 梅山糺編『増田義一追懷録』実業之日本社、昭和25年、P.53

㉘ 瀧富太郎『自伝風雪七十年』瀧富商店、昭和37年、P.104

㉙ 新渡戸の修養論は、キリスト教的な人生観を、日本の伝統的な用語に託して表現したところに特徴がある（武田清子、前掲論文、P.301）。新渡戸は、その中で、人格的主体としての自己の確立を人生の目的に据え、日常生活の実践の中でその目的に近づくように務めるべきことを主張した。それは、日々の生活の中で主体的に物事を考え、克己心、勇氣、雅量などを養い、他者を積極的に受容していくなかに、精神的な満足を得るという生き方である。

㉚ 増田義一「教育に乏しき実業青年にも如期発展の光明あり」（『実業之日本』明治42年6月15日号）。なお、この論説は、前掲『青年と修養』にも収められている。

㉛ 都倉瓊川『奮闘活歴抜群の人々』実業之日本社、昭和8年、P.30。

㉜ 同書、P.31

㉝ 同書、P.26

㉞ 梅山糺編、前掲書、P P.392～3

㉟ 本文でとりあげた11人以外に参考とした人々は、以下のとおりである。

『西国立志編』については後藤新平（東京市長）、松本善作（農業）、「学問のすすめ」については松永安左衛門（電力中央研究所）、「実業の帝国」については福田良太郎（北陸館）、新渡戸稲造の修養論については岩切章太郎（宮崎交通）、増田義一の修養論については中野金次郎（国際通運）、などである。

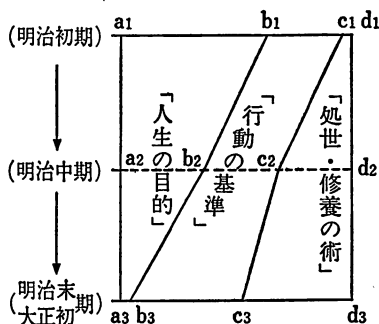
㊱ 修養論を読んだ人々の中に、人生の目的や行動の基準、処世・修養の術について反応し内在化する傾向が強くみられるために、本稿では、このような視点から

受けとめ方の時代的な傾向性をみてきた。

この時代的な変化を図示すると、次のようになる。

この図をみると、上方の明治初期では、 a_1-b_1 間がとくに広くて c_1-d_1 間が狭くなっているから、人生の目的に反応する傾向がとくに強く、処世・修養の術についてはその傾向が非常に弱いことを示している。ところが、時間軸を下って明治中期をみると、 a_2-b_2 、 b_2-c_2 、 c_2-d_2 間がほぼ均等になっている。これは、人生の目的、行動の基準、処世・修養の術のいずれにも反応する傾向があることを

図 修養論受容の時代的变化



示している。そして、下方の明治末・大正初期では、明治初期とは逆に、 a_3-b_3 間が非常に狭くて b_3-c_3 、 c_3-d_3 間が広がっているから、人生の目的に反応する傾向が非常に弱く、行動の基準や処世・修養の術についてはその傾向が強いことを示している。